

The Black Create Summoner
黒の創造召喚師

IX



幾威空 Iqul Sera

目次

本編 7

Extra Side Episode 233

ステータス紹介 271



キリア=レンリル

エルフ族の少女。
回復から
戦闘支援までこなし、
仲間を支える。

ソアラ=レミント

狐耳を生やした
獣人の少女。
糸を操る魔鋼糸術の
使い手。

ディエヴス

世界を管理する神。
魔書を集めさせるため、
ツグナを転生させた。

アイオゲート

全ての竜の頂点に立つ、
始祖竜とも呼ばれる
黒き巨竜。

リーナ

ツグナの妹で、
アリアの双子の姉。
火系統魔法を
得意とする。

アリア

ツグナの妹で、
リーナの双子の妹。
細剣での剣技を
得意とする。

ツグナ=サエキ

神様により異世界へと
転生させられた少年。
オリジナルの魔物を呼び出す
「創造召喚魔法」を与えられ、
七つの魔書を集める旅に出る。

スバル

古代竜が生まれ
変わった姿。
友としてツグナと
行動を共にする。

主な
登場人物
Main Character

ツグナに従う召喚獣たち

フランメル

コクヨウ

リル

ジエスター

白兔

サクヅキ

ファントム

比奈菊

ニア

本編

第1話 あれから

「――よし。竜の逆鱗は……これでようやくコンプリート、か」

ツグナはふう、と軽く息を吐き背もたれに寄りかかりながら、机の上に並べたものを眺めて、誰に聞かせるわけでもなくポツリと呟いた。

机の上に横一列に並べられたそれらは、彼がこれまでに厳しい試練を乗り越えて手に入れてきた、努力の結晶とも呼べる五枚の竜の逆鱗である。左から赤、紫、緑、水色、そして黄土色の鱗と並べられ、窓から差す陽光を浴びてその縁がキラリと輝いた。

「つーか、揃えるのに思いの外時間がかつちまったよなあ……まあ合間合間にギルドの依頼をこなしながら回っていたんだから仕方がないっちゃあないんだけど……」

ツグナはため息交じりにカリカリと頭を掻きつつも、机の上に並べた鱗の一枚一枚に目をやって、そう呟いたのだった。ひとしきり眺め終えた後に再び背もたれに身を預けたツグナは、ぐつと背を伸ばして窓の外へと目を転じる。その窓の向こうには、日の光を受けて青々とした葉を茂らせる木々とどこまでも広がる澄んだ青空があった。

(あれからもう三年も経つのか……)

どこか茫洋とした目で景色に見入っていたツグナは、過ぎ去った年月の間に起きた様々な出来事を脳裏に思い浮かべながら心の中に呟く。

「呪い島」と呼ばれる孤島で、「色持ち」の一人である「赤き火」、そして彼女の連れていた魔書使いのアデーレの強襲を受けてから、既に三年余りの月日が流れていた。すなわち、ツグナが泡瀬竜――アングレイトと邂逅し、あの竜が住処をカリギュア大迷宮最下層へと移してからも、三年となる。

ツグナは今年で十六歳となり、この三年で身長も大きく伸びた。かつては中性的で幼さが垣間見えた顔は、その生い立ち故にどこか影がある雰囲気を感じられるのは相変わらずだったが、今ではやや精悍さが窺える青年の顔つきとなった。また、三年の間に成長し、大きくなった体躯には無駄のない筋肉がついた。そのかいもあつてか、ここ最近ではギルドに顔を出しても、彼のことを知らない、他所の街からやって来たばかりの冒険者から「ガキ」などと舐められることもなくなっていた。

もっとも、元々そうした輩はツグナのことを知らない田舎出身の冒険者に多く見られた。そのため、大抵はギルドカードを提示すれば、それまでの威勢は見る影もなくなり、すぐすと引き下

るケースが多かったのだが。

この三年間、ツグナはギルドで依頼をこなしつつ、アングレイトからの情報を頼りに残りの竜たちと出会っていた。アングレイトとの邂逅と試練を終えた時点で、ツグナがまだ出会ったことなかった竜は三体である。その竜とは――

獄炎竜――ルベライトリア

砲雷竜――スペリオタイガ

嵐気竜――デマントイド

この三体だ。

いずれの竜も、訪れたツグナに対して厳しい試練を課した。それは、ギルドの最高位ランクであるSランクにまで登りつめたツグナにさえ「勘弁してくれ」と言わしめるほどのもの。そもそも並の冒険者ならば、試練を受ける前に対峙した竜の迫力に吞まれて退散していただろう。

彼の眼前に並ぶ逆鱗は、その竜たちが課した試練を見事突破した勲章とも言うべきものなのである。

（――にしても、三日間ぶつ通しで戦うのはさすがに勘弁だな。試練だったとはいえ、できればもう二度と経験したくないな……）

ツグナは机の上に並べてある逆鱗を手に取り、ふとその時の状況を思い返した。スッと彼の目の

前に掲げられたのは、燃え盛る炎の如く赤い鱗だ。この鱗の持ち主はルベライトリア、別名「獄炎竜」と呼ばれる竜である。

この竜は火口付近を住処としており、灼熱地獄とも呼べる環境下で平然と過ごしていた。

獄炎竜・ルベライトリアが、訪れたツグナに提示した試練――それは「己の力と技を我に認めさせろ」というものだ。

竜は迷宮に棲まう怪物よりも格上の危険度を持つ。最下位の竜であるワイバーンを討伐するにしても、その依頼を達成するのに必要な冒険者ランクは少なくともBランクだ。また、このランクの冒険者が最低でも十名ほど集まった上で討伐するのが定石とされている。

そしてルベライトリアは、ワイバーンなどより遥かに位の高い「古竜」と呼ばれる種である。それほど力のある竜の課す試練となると、ワイバーン討伐の難易度などとは比べるまでもないだろう。だがツグナはたった一人で、ルベライトリアの住処に乗り込み、彼の出す試練をクリアしたのだ。そう考えれば、この話を聞いたリアベルの街のギルドマスター、ユティスがたつぷり三分ほど固まったのも無理からぬ話だろう。

しかし、ツグナとして勝算がなかったというわけではない。

それまでも竜たちに出会っていることや、ツグナが有する魔法――《創造召喚魔法》や《大罪召喚》という類稀な条件が揃っていたからである。



属性

名前：ツグナ=サエキ 種族：人族
性別：男 職種：創造召喚師
レベル：173
年齢：16

ステータス

体力……………7787/7787 敏捷……………777
魔力……………8641/8641 精神……………772
筋力……………775 器用……………774
耐久……………769

スキル

異世界理解 (言語・文字)
回復速度アップ (HP・MP) …… Lv.10
回復量アップ (HP・MP) …… Lv.10
マップ (広域・詳細) …… Lv.8
魔力消費削減 …… Lv.9
スキル習得速度アップ …… Lv.8
魔闘技 …… Lv.11
[+夢幻燈火]
木工 …… Lv.9
料理 …… Lv.11
索敵 …… Lv.8
隠蔽 …… Lv.8
隠密 …… Lv.9
感知 …… Lv.10
[+気配感知]
解体 …… Lv.9
刀術 …… Lv.12
[+桜花一閃] [+百花繚乱]
[+一閃万破] [+春紅桜]
[+緋扇閃陣] [+虚花流刀]
[+瞬閃]
複合技:[+万破繚乱]
二刀短剣術 …… Lv.9
[+乱れ斬り] [+徒花]
[+炎天白雨] [+双頭崩牙]
[+八相発破]
アイテムボックス (∞)
必要経験値 1/20 …… Lv.7
[+必要経験値 1/20 (レベル)]
[+必要経験値 1/20 (スキル)]

固有スキル

異界の鑑定眼 …… Lv.10
[+スキルレベル表示]
[+原材料・必要スキル表示]
[+鑑定目録]
創造召喚魔法 …… Lv.11
[+緋化] [+同時召喚]
[+複数召喚] [+スキルリンク]
[+拡張自在] [+混成召喚]
[+大罪召喚]
[憤怒] 条件解放済: 竜頸刀
[暴食] 条件解放済: 邪骨蠅杖
[強欲] 条件解放済: 盗狐装甲
[嫉妬] 条件解放済: 黒鎖蛇鏢
[色欲] 条件未解放
[怠惰] 条件未解放
[傲慢] 条件未解放

称号

年上キラー
ユニーク使い
耐え抜く人 (M体質)
鈍感野郎
一流料理人

回想から戻ったツグナは、ふと思い立ち、自らのステータスを「異界の鑑定眼」スキルで確認する。

「わははははっ！ いい……いいぞ黒き少年っ！ もっとだ！ もっと我に見せてみる！ お前の持つ力を！ 技を！ その全てを！」
ツグナが手札を切る度、ルベライトリアはそう言いながら口角を引き上げ、嬉々として戦いに臨んだ——この激闘は、幾度もの死闘を乗り越えてきたツグナが「二度と経験したくない」と心中心に零してしまうほどのだから、その凄まじさたるや推して知るべしだろう。そうして精根尽き果てた両者にもたらされた戦いの結末は、「引き分け」という残念なものだった。
戦いの後、ルベライトリアから逆鱗を渡されたのはツグナにとつて僥倖以外の何物でもなく、胸を撫で下ろす結果となった。

だが……ルベライトリアはツグナの予想を超える、相当な戦闘狂だったため、火口という灼熱地獄の中での戦闘は、昼夜を問わず三日間に亘って繰り広げられることとなってしまった。
試験をクリアする勝算としてあった手札は、予想以上にルベライトリアの戦闘意欲に火を付けてしまったのだ。
「わははははっ！ いい……いいぞ黒き少年っ！ もっとだ！ もっと我に見せてみる！ お前の持つ力を！ 技を！ その全てを！」

この三年、弛まぬ努力によりツグナは各スキルのレベルを格段に向上させていた。ステータスの確認に使用した「異界の鑑定眼」を始め、刀術や創造召喚魔法については、軒並み二桁を超えている。

スキルのレベルは使用しなければ向上せず、また各種の基礎能力値に比べ上昇速度が遅いため、二桁に達することはごく稀である。しかし、ツグナはその「ごく稀」であるはずのスキルを複数所持している。これはひとえに、彼の努力が並々ならぬものであったことを、雄弁に物語っていた。

「おっと……もうこんな時間か」

ステータスの確認を終え、窓の外に見える太陽が既に中天を過ぎていたことに気付いたツグナは、机の上に広げていた竜の鱗をアイテムボックスの中に仕舞い込むと、足早に部屋を出た。

「さて、と。そういえば……今日の昼飯、何にしようかまだ考えてなかったな。うーん……もうこの時間だし、あまり手の込んだものは避けたいんだけど、最近アイツら妙に舌が肥えてきたからなあ……リクエストに應えるのも難しくなってきたるんだよなあ……」

カリカリと頭を掻きながら階段を降りるツグナは、仲間たちに対する愚痴をブツブツと小さく呟く。

長年ツグナの作る料理を口にしてきた仲間たちは、今では立派な美食家になっていた。

最近では、ツグナの相棒たる古代竜のスバルでさえも味に口を出すようになってきたのだから、ツグナとしては頭の痛い思いだ。

だが、そんな愚痴を吐いてはいるものの、「どうやってアイツらの舌を喰らせようか」と思案しつつ、どこか楽しそうに仲間のもとに向かうのだった。



「おお……やってるやってる」

時間も時間だから手っ取り早く仲間のもとに向かおうと考えたツグナは、家を出るとすぐに召喚獣のジェスターを呼び出し、空間転移の能力を持つ道化門を潜った。その門の先でツグナが目にしたのは、水色の鱗を持つ巨大な竜——アングレイトに狐耳の女性が単身で挑む、無謀とも思える戦いであった。

ツグナがやって来た場所は、カリギユア迷宮の最下層に広がる巨大な空間だ。迷宮の中とはいえ、それなりの広さがあるために戦闘への支障は皆無に等しい。その空間内には、大地を蹴って縦横無尽に駆け回るソアラと、長い首を左右に動かしては襲い来る攻撃を防ぐアングレイトがいる。両者が織り成す高度な戦闘は、もはや胸躍るショーのようでもあった。そんな印象を裏付けるかの



属性

名前：キリアベル＝レンリル 種族：妖精族

性別：女 職種：魔術師

レベル：126

年齢：133

ステータス

体力……………5653/5653 敏捷……………448

魔力……………6673/6673 精神……………582

筋力……………452 器用……………573

耐久……………421

スキル

風系統魔法……………Lv.7

[+ウインドカッター]

[+エアリアルサークル]

[+鳳凰嵐舞]

補助系統魔法……………Lv.9

[+回復魔法]

[+リキュア]

[+リザレクション]

[+快癒]

[+整調]

[+支援魔法]

[+アディショナル]

[+阻害魔法]

[+ギルティダイス]

複合魔法

[+白驟雨]

魔力消費削減……………Lv.8

杖術……………Lv.7

弓術……………Lv.4

投擲術……………Lv.4

魔闘技……………Lv.6

見切り……………Lv.5

先読み……………Lv.5

固有スキル

精霊眼……………Lv.5

称号

支える者
確率変動の申し子

ように、ツグナの視界の端には飲み物を片手に戦闘を見つめる、他の仲間たちの姿も確認できた。そうしたキリアやリーナ、アリア、そして今まさに戦っているソアラは、ツグナを中心とするレギオン「ヴァルハラ」の面々だ。彼女たちの姿を視界に収めながら、ツグナはこれまでに過ぎ去った時間を一人囁み締めていた。

三年という年月は、彼女たちを幼さの残る少女から見目麗しい女性へと変身させた。まず、キリアだが、彼女は妖精族という長命さが特徴の種族でありながら、その身長をわずかに伸ばし、顔立ちにも気品が表れ始めている。また、美貌もさることながら、レギオンの一員として役立てるようと、新たに弓術・投擲術を身に付け、中々遠距離攻撃が可能となった。

さらに補助系統魔法にも磨きがかかり、そのレベルは二桁に届かんとしていた。彼女の魔法の腕前は、まさに一流と呼ぶにふさわしい。

今では回復から戦闘支援と、戦線を支える要として機能しており、ツグナが安心して背中を預けられる、頼もしい存在に成長を遂げていた。

ステータスの方はどれくらい上がったのだろうかと、再び鑑定眼を使用して確認する。

妖精族の特性で、体力・筋力・耐久・敏捷の各ステータスは低い、かなりレベルが上がったなと感心しつつ、ツグナはキリアの横にいるリーナとアリアの双子の姉妹に目を向けた。

彼女たちについては、それぞれの性格が外見にも表れており、リーナは落ち着いた静謐さを纏い、対照的にアリアは快活さが滲み出ていた。背丈はどちらも今のツグナより若干低いものの、ギルドに赴けば一人二人と女日照りの男たちから声を掛けられるほど、魅力的な女性である。

リーナについては、落ち着いた物腰と美貌——そして涼やかな切れ長の目に、リアベルの冒険者たちの一部には「あの子に罵られたい」というコアなファンがいた。

もともと、当の本人はそうした周囲の動向などにいちいち左右されることなく、ただ「群れるのが好きなら勝手にすればいい」と放置を決め込んでいるのだが。

そんなリーナの持つ火系統魔法——「業火の狩人」は、その魔法レベルの高さを雄弁に物語る、彼女の代表的な魔法となっている。

一方のアリアは、その胸が「ヴァルハラ」の中で一番大きく成長を遂げており、子供っぽさの中に、女性としてのある種の艶やかさがわずかに顔を覗かせるようになっていた。快活でハキハキとした物言いは変わっていないが、冒険者の間ではそれも魅力の一つと好意的に捉えられており、リーナと同様、熱烈なファンが多かった。

こちらについても、特に実害を受けていないことからアリアは放置している。だが、彼らは折に

触れてリーナのファンと陰で衝突しており、双子たち本人のあずかり知らぬ所で、ユティスの頭痛の種となるのだった。

そんな問題もあるものの、アリアの剣技は同ランクの冒険者の中でも無類の攻撃力の高さを有していることから、相当な実力者として認められている。

すっかり成長した双子の妹たちについても、ステータスはどうなっているのだろうか、ツグナは鑑定眼を使用する。



属性

名前：アリア=ハイエル 種族：人族

性別：女 職種：剣士

レベル：129

年齢：16

ステータス

体力……………5850/5850 敏捷……………589

魔力……………6390/6390 精神……………568

筋力……………581 器用……………571

耐久……………577

スキル 固有スキル

剣技……………Lv.8

[+スラスト]

[+受け流し]

[+仙城破碎]

[+朱鳳散華]

魔闘技……………Lv.7

雷系統魔法……………Lv.6

[+ショックライザー]

風系統魔法……………Lv.5

[+ダブルツイスト]

[+エリアヴォート]

能力向上……………Lv.5

身体能力向上……………Lv.8

見切り……………Lv.6

先読み……………Lv.7

気配察知……………Lv.7

称号

けんせん き
剣戦姫

属性

名前：リーナ=ハイエル 種族：人族

性別：女 職種：魔術師

レベル：128

年齢：16

ステータス

体力……………5730/5730 敏捷……………565

魔力……………6450/6450 精神……………585

筋力……………558 器用……………574

耐久……………552

スキル 固有スキル

火系統魔法……………Lv.9

[+グレイブフレア]

[+クロスノヴァ]

[+アストラルノヴァ]

[+業火の狩人]

水系統魔法……………Lv.7

[+コキュートス]

[+慈母の抱擁]

雷系統魔法……………Lv.6

[+閃轟]

[+千和雷槍]

[+封殺雷劫]

魔力消費削減……………Lv.4

杖術……………Lv.3

魔闘技……………Lv.4

魔力操作……………Lv.5

称号

獄炎を操りし者



属性

名前：ソアラ＝レミントン 種族：狐人族
 性別：女 職種：暗殺者
 レベル：135
 年齢：18

ステータス

体力……………6070/6070 敏捷……………601
 魔力……………6692/6692 精神……………586
 筋力……………593 器用……………603
 耐久……………587

スキル

火系統魔法……………Lv.5
 [+ファイアーアロー]
 [+ヒートランス]
 [+焔扇陣]
 水系統魔法……………Lv.5
 [+ニードルレイン]
 [+ウォーターカッター]
 [+ウォーターバレット]
 [+落水壁]
 隠密……………Lv.7
 [+忍び足] [+無音歩行]
 魔鋼糸術……………Lv.9
 [+天鋼鎖縛] [+天鋼糸断]
 [+魔鋼結界] [+蛇鋼槍]
 複合技：[+導火の繰り手]
 弓術……………Lv.3
 [+一射確殺] [+精密射撃]
 [+曲射術]
 魔闘技……………Lv.8
 見切り……………Lv.6
 先読み……………Lv.5
 気配感知……………Lv.7
 索敵……………Lv.5
 身体能力向上……………Lv.7

固有スキル

妖狐之焔……………Lv.6

称号

幻系の繰り手

最後は、今アングレイトと戦っているソアラだ。彼女は、女性らしい穏やかな雰囲気を出しながらも、日々の鍛錬で引き締められた肉体は男共を惑わすほどの成長を遂げていた。だが、悲しいかなその胸は外見的に若干成長した程度のキリアと同格のレベルで、双子の姉妹に完全に負けているところが、同性の涙を誘った。

そんな彼女ではあるが、巨大な竜と戦えている通り、実力はかなりのものだ。外見的な成長については他の仲間たちに一步遅れる彼女だが、「ヴァルハラ」の中では、レギオンマスターたるツグナに次ぐレベルの高さを誇る。彼女の代名詞たる魔鋼糸術は、スキルレベルがもうひと息で二桁に届くほどまでに成長を遂げ、三年前よりもさらに洗練されたものとなっていた。また、彼女のように、「糸」を使って相手を倒す戦闘スタイルを持つ冒険者はほぼ存在しないことから、その稀少性とレベルの高さが相まって、ギルドの中でも注目度は高い。

そうして個々に成長した「ヴァルハラ」の仲間たちは、一人一人がギルドで一線級の活躍を見せていた。現在は仲間全員がギルドカードを所有し、その技量はAランクにまで至る。

ちなみにツグナは、これまでの功績及びギルドへの貢献度から、Sランクにまで格上げされている。

所属メンバーが全員Aランクオーバーなどというのは滅多にあるのではなく、それはギルドマスターとして経験豊富なはずのユティスでさえ驚かせた。あまりの驚きぶりにツグナが「それほど驚かなくてもいいだろう」と告げると、彼女はツグナのレギオンがどれほど異常なのかを二時間以上に亘り懇々と説明してきたものだ。

それはツグナにとっては苦痛とも言える所業だったのだが、ユティスがそうしてしまうのも無理はない。なぜならば、ギルドに登録する冒険者の中で、Aランクになれるのはほんの数%に過ぎないという現実があるからだ。

Aランクというのは、一般に冒険者の中でも一流と認識され、その信頼性の高さからひっきりなしに依頼が舞い込む。「このランクに就くことができれば一生安泰」と囁かれるほどである。

ましてやツグナのようなSランクは、さらに数が絞られる。

レギオンの構成員が全員Aランク以上ともなれば、間違いなくトップレギオンの一つとして冒険者の間で話題に上るようになる。

それほどまでの実力者で構成されるレギオンなど、ユティスもかつて遭遇したことはなかった。

しまいには「あんたたち全員が異常なのよ」とのお言葉を、ツグナはユティスから貰ったのだった。

「……状況はどんな感じだ？」

戦闘の邪魔にならないよう、ゆっくりと壁を伝ってキリアたちの傍にやってきたツグナは、小さな声でリーナに声を掛けた。

「ああ、兄さん。いらして良かったですね。あの二人は少し前から戦っています……ソアラが押しているとは言い難いですね。アングレイトさんの巨体は、攻撃を当てる方としては格好的なんです。如何せん防御力が想像以上です。私たちも彼女の前に交代で挑みましたが、キリアと私は魔力切れになり、アリアは時間経過と共に剣技のキレがなくなつて、最後はいずれも吹っ飛ばされました」

「何あの鱗っ！ 硬すぎるよ！ いくら当てても傷一つつかないんだもん！」

ガツクリと肩を落としたながらも淡々と語ったリーナの横で、地面にべたりと腰を降ろしたアリアが頬を膨らませて文句を垂れる。

「そう文句言うなよ。確かにあの鱗は厄介だけど、攻略の方法はあるさ」



「例えば？」

訊ねられたツグナは、「そうだなあ……」と顎に手を当てながら一瞬考え込み、静かに言う。

「一番手堅いのは、同じ場所に何度も攻撃を当てる……とかな。ある程度ダメージを蓄積させれば、いくら硬くてもいつかは通るさ」

「……でも、それって同じ場所に攻撃を当てる正確さが求められますよね？ 相手も動くわけですし、難度が高すぎるのでは？」

二人の会話に耳を傾けていたリーナが割って入る。ツグナは彼女の指摘に「確かにな……」と頷いた。

「でも、リーナたちがこの場所に来られるようになったのは最近のことだろ？ アングレイトはアルガストと肩を並べるほどの格を持つ竜だ。そんじょそこのモンスターとはワケが違う。そんな竜を負かそうとするのなら、当然こっちに求められるレベルだって高くなるもんさ」

ツグナは苦笑しながらアリアを宥める。

彼らが今いるカリギユア迷宮は、そこらの迷宮に比べて一段も二段も格上の怪物たちが、入ってすぐの階層から跋扈している。多くの者から恐怖の象徴として扱われるほど、難易度の高い迷宮なのだ。

そんな迷宮を単独で踏破できるような力を有する彼女たちが、揃いも揃って「敵わない」と文句

を垂れるのだから、一般の冒険者からすればアングレイトの強さは想像も及ばないだろう。

「走れ！ 蛇鋼槍っ！」

ソアラが勢いよく地面に打ち付けた拳に応じるように、土中からボコツと音を立てて姿を現した銀系の槍。まるで意思を持っているかのように、その身を蛇の如くくねらせながらアングレイトのもとに向かう。瞬時のうちに編み上げられたこの銀系の槍はなかなか強靱で、レベルの上だった今では、掠れるだけでそこの剣を刃毀れさせるほどだ。

にもかかわらず、彼女と対峙するアングレイトはその全身を覆う鱗でもって襲い来る銀系の槍を易々と弾く。さらに、お返しとばかりに水系統魔法で作り上げた小さな水の弾を雨あられとソアラに向けて射出した。

「まだまだあああっ！」

無数の水弾が襲い掛かり、地面に小さな穴を空ける中、ソアラは一步も退かずさらに前へと出る。
「天鋼鎖縛！ 導火の繰り手！」

蛇鋼槍を解除したソアラが反対の拳を地面に打ち付けると、アングレイトの足元から細い銀系が伸びて手足を縛りつけた。そして彼女の発した言葉に応じ、突き立てた拳を起点に糸を伝って、蒼い炎がアングレイトの全身を包み込む。

「どうだ！」

自身の渾身の一撃に、思わず快哉を發したソアラ。しかし、銀系を身体中に巻き付かせたアングレイトは、蒼い炎に包まれながらも魔法を放つ。

「えっ!? ちょ、ちよつと——」

その後の言葉を紡ぐことができず、ソアラは放たれた魔法を受けて壁際へと吹っ飛んでいく。

「まあ、こうなったか」

一部始終を見守っていたツグナはポツリと呟くと、両者の間に立って、戦闘を中断させたのだった。

「うう……悔しい！ でも次こそは絶対に！」

先ほどの戦闘を思い返し、ギリギリと奥歯を噛んで悔しげな顔を浮かべつつも、器に入ったスーブを勢いよく飲み干すソアラ。そんな彼女に、ツグナは苦笑を浮かべる。

「ふっ……負けてもなお我に挑むか。よからう。次もその気概を押し折ってくれるわ」

「いや、年甲斐もなく煽るなよ……」

ソアラの言葉に、アングレイトはニヤリと口の端を持ち上げながら自信満々に答える。その態度が余計に神経を逆撫でしたのか、ソアラは一層悔しさを滲ませながらヤケ食いし始めた。

そんな彼女の食いつぶりに、他の面々も苦笑しながら食事を進めるのだった。



その日の夜。森がすっかり闇に覆われる中、ツグナは一人、ジェスターの道化門^{ゲート}を潜ってアングレイトのもとを訪れた。

「……うん？ 何だ？ まさかお前まで、ソアラたちのように我と戦いたいのか？」

「いや、別に戦う目的で来たわけじゃないさ。俺がここに来たのは、これの話だ」

夜更けということもあって、大きく口を開けてあくびをするアングレイト。睡魔に襲われているからか、昼間よりも若干気怠^{けだる}そうな声で問いかけた彼に、ツグナは五枚の逆鱗を取り出しながら静かに告げる。

「——これで五枚の逆鱗が揃った。いい加減話してもらうぜ？ 三年前のあの時、いくら聞いても答えてくれなかったことを、な」

五枚の鱗を視界に捉えたアングレイトは、やおら首を持ち上げると、ツグナを真正面に見据えて語り始める。

「ふむ……よかろう。だが、我が知っていることはそれほど多くはない。詳しいことは直接会って

聞いてみるのだな」

「直接会って聞く……？ 一体誰に？」

アングレイトの言葉に首を傾^むげながら、ツグナはさらに問いかける。彼の視線の先、煌^{きら}びやかな水色の鱗を纏った巨大な竜は、その黄色の目を逸らすことなくツグナの問いに答えた。

「我ら竜種の源——その始まりにして、今もなお我らを見守る黒き竜に、だ。彼^かの竜の名はアイオゲート。別名『始祖竜^{しそりゅう}』とも呼ばれる偉大な彼^かの竜であれば、お前の問いに答えることができるよう」

「黒い竜……だと？ ちょっと待て。そんな話、俺は今まで聞いたこともないぞ」

アングレイトの口から飛び出した「黒い竜」の話に、ツグナは目を丸くさせて詳細を訊ねる。ツグナは竜との邂逅を重ねながら、この大陸を方々旅してきている。しかしながら、アングレイトの話に出てきた竜の名は、一度も見聞^{みきこ}きしたことがない。

「それはそうであろう。何せ彼^かの竜はこの大陸にはいないのだからな」

「この大陸にはいない……？ なら、どこに行けって言うんだ？」

ますます謎が深まった様子を見せるツグナに、アングレイトは一つの解を示す。ぐっと伸ばされた腕、その爪が指す先には、ツグナが掲げていた五枚の逆鱗があった。

「その五枚の逆鱗は始祖竜と会うための資格の証明であると同時に、鍵でもある。より具体的に言

えば、逆鱗を材料に生み出されたアイテムが、彼の竜のもとへと導くのだ」

「この鱗が……」

まじまじと五枚の鱗を見つめるツグナに、アングレイトはさらに話を続ける。

「ああ。そしてそのアイテムが指し示した方角にいる始祖竜に会うには、逆鱗を託した竜と共に行くのが掟なのだ。もしお前が真実を知りたければ、今我が話したアイテムを作製し、我らを引き連れて始祖竜に会いに行くがいい。太古より生きる彼の竜ならば、お前の問いに答えてくれるだろう。だが……」

一度そこで言葉を切ったアングレイトは、じつとツグナを見つめながら、わずかの間を置いて告げた。

「真実は時として残酷なものだ。故に、それを知ってもなお自分の選んだ道を突き進む覚悟があれば、の話だがな」

「……ああ、分かった。一応頭の片隅には留めとくよ」

アングレイトの忠告を聞き終え、ツグナは家に戻るのだった。

第2話 光の差す方へ

アングレイトとの話し合いの翌日。陽が昇ると同時に、早速ツグナは行動を開始した。

森に出かけた彼はまず、左腕から魔書を引き抜いてジェスターを呼び出す。そして彼の管理する道化門を使って、地下遺跡を住処とする震鉦竜・アルガストを始め、四体の竜の元へと向かった。

「準備が整い次第、黒竜に会いに行く」と伝えるためだ。どの竜も、カリギュア大森林から離れた場所に住んでいるが、ツグナは以前竜たちと邂逅した際にその地点をマップスキルでマーキングしておいたため、特に苦労せずに再会することができた。

ここまでは順調だったのだが、一方で魔法道具の作製がツグナを悩ませた。

（ああ、クソッ……「場所を示す」つつても、一体全体どんなアイテムを作ればいいのかさっぱり分からん……）

竜たちとの再会を終えて森に戻ったツグナは、ガリガリと頭を掻きつつ、アイテムの構想を練っていく。何時間もかけてあーでもない、こーでもないと何度も練り直すのには訳があった。

ひと口にアイテムと言っても、同じ効果でその形・大きさは様々であり、明確なイメージのない

ままだに作ったものでは、期待した効果が得られないのだ。これは過去に、通信用アイテム「星夜の腕輪」を作製する際に得た教訓で、錬金魔法を持つ召喚獣フランも同様の意見を持っていることから、まず間違いないとツグナは確信している。

また、アングレイトの話に出てきたヒントは、「自分が望むものがある場所を指し示す」という、何とも漠然としたものだ。これでは具体的な完成形が思い浮かばないのも無理はない。それに加え、今回は「竜の逆鱗」という稀少なものを使用する。失敗は許されないと云ってもいい。

作製自体はフランに任せるか、もしくは創造召喚魔法の能力のうちのひとつ、「スキルリンク」を使用すればツグナも作製することができるようになる。とはいえやはり、具体的なイメージがなければ作れるものも作れないのだ。

（うああ……どうするかな。アングレイトの話から察するに、羅針盤っぽいものを作ればいいのは分かるんだが……）

考え込みながらカリギユア大森林のど真ん中で横になる彼の姿は、この森に棲息する怪物たちにとっては不用心な獲物に過ぎない。耳に微かに聞こえてくる獣たちの息遣いと所作を窺う殺気立った視線は、常人には耐え難いものだろう。だが、幼い頃からこの森をまるで自分の庭のように駆け回っていたツグナにとっては、些末なことだ。

怪物たちもツグナの強さを本能的に嗅ぎ取ったからか、ただ見ているだけで自ら襲い掛かること

はしなかった。

（材料も稀少なものを使うわけだし、高性能なものがいいよな。それから持ち運ぶことも考えるとできる限り小さい方がいい……）

草むらに寝転がりながら考えを纏めていたツグナの頬を、森の中に吹き込む風が撫でていく。風に揺られる枝葉が陽の光を遮り、大地に描かれた光と影の斑模様（まだら）が右に左にと動いた。

ゆっくりと流れる時間の中、ふとツグナの目に真つ青で小さな木の実が留まった。

（あれは木の実、か。まん丸で風に揺られてくるくる回ってやがる。ははっ……まるで地球みたいだな）

太い枝にちょこんとぶら下がる小さな木の実。直径三セルメラほどの小さな球体がツグナの脳裏に浮かぶ「地球」のイメージとリンクした。

その瞬間――

「あっ！ そうだ……そうだよ」

ツグナの頭にハッキリとしたイメージが出来上がった。

「こうしちゃいられない！ さっさと戻って今のイメージをもっと膨らませないと……！」

ガバツと勢いよく起き上がったツグナは、それまで眉間に皺を寄せていたのが嘘のように晴れやかな顔つきで、急いでその場をあとにするのだった。



——アングレイトの話聞いてから一週間後のこと。カリギユア大森林の開けた場所にはツグナを始め、「ヴァルハラ」の面々やシルヴィ、リリア、そしてアングレイトが集まっていた。

「うん？ 他の竜たちはどうした？」

左右に首を振って周囲を確認したアングレイトが開口一番に告げる。そんな彼に、ツグナは微笑を湛えながら答える。

「ああ、他の竜についてはこれから呼ぶよ。話は既にしてあるから、問題ないさ」

軽やかな口調で話し始めたツグナは、左腕から魔書を引き抜き、ジェスターを召喚した。

「ジェスター、頼む」

ツグナのひと言を受け、ジェスターはやおらお辞儀すると、召喚した道化門を正面に捉えて両腕を左右に広げる。

するとその動きに合わせるように、一つの門が四つに分裂した。

「うわっ……」

「圧巻ねえ……」

ジェスターの様子を眺めていたソアラとシルヴィから声が漏れる。どこか小憎らしくも思える道化の門が四つ、それが瞬時に現れれば、二人のように驚くのも無理はない。

これはこの三年の間にジェスターが習得したスキル「同時開門」である。効果は単純明快で、複数の道化門を出現させ、それぞれを任意の場所に繋げられるスキルだ。出現可能な門の数はレベルに依存するものの、今のジェスターであれば軽く十を超える門を同時に操ることができる。

そして、各門が開いた奥からは、アルガストを始めとした四体の竜がゆっくりと姿を現した。

「初めて会ってから四年近く、ここまでよく頑張った」

姿を現した四体の竜のうち、まず初めにツグナに声を掛けたのはアルガストであった。黄土色の鱗に身を包み、震鉦竜とも称えられるこの竜は、ツグナの姿を見ると嬉しそうにわずかに目を細める。

「また会ったな、黒き少年！ 近いうちにお前と再戦したいぞ！」

アルガストに続いて声を掛けたのは、獄炎竜とも名高いルベライトリアだった。炎をその身に宿したとも思える真っ赤な鱗は、彼の闘志を表しているようだ。

「まったく……お前は口を開けばそうした言葉ばかりだな。そんな肉体言語ばかりで語り合おうとするから我らの中で断トツに遅いのだ」

ルベライトリアの言葉に呆れた様子で呟いたのは、スペリオタイガだった。砲雷竜とも呼ばれる

この竜は、全身が紫色の鱗で覆われており、アングレイトたち五体の竜の中で最も速く飛ぶことができる。

「何だと？ お前こそ速く飛ぶことにこだわり過ぎだ。いざ戦闘となればその速さで戦場からとつと逃げ出すのではないか？」

「ああ？ 今何と言った」

軽く鼻で笑いながら呟いたルベライトリアの挑発に、スペリオタイガは目を鋭くさせて低い声で問いかける。

「何だと？ もう一度言ってほしいのか？ 老いて耳が遠くなつたか？」

赤と紫の竜の間に険悪な空気が流れ、ツグナたちが内心「ここで大騒ぎするのは止めてくれ」と切に願っていた時――

「ははっ。こうやって顔を合わせるのはいつぶりだっけ？ にしても、二人は相変わらずだねえ……」

両者の様子を遠巻きに眺めていた緑色の鱗を持つ竜が、間延びした声を上げる。名をデマントイドといい、嵐気竜とも呼ばれる竜だ。

この竜が住処とするのは大陸の西の端にある森の奥で、他の四体に比べて年が若く、孤独を好む気質がある。そのためか、五体の竜の中でも若干浮いた存在だった。ツグナも出会った瞬間に「コ

イツはマイペースなヤツだ」という印象を抱いたほどである。

「はあ……折角^{せうかく}こうして我らが久方^{つと}ぶりに集ったことは歓迎するべきなのだろうが、主役を差し置いてどうする」

ため息をついたアングレイトがギロリとルベライトリアとスペリオタイガの両者を睨みつけ、そのすぐ後にスツとツグナに視線を寄越した。

「わざわざここまで来てもらって悪いな。アングレイトの話では、俺がこれから向かうとする場所には、アルガストたちにも来てもらわないと行けないみたいだからな。こうしてゲートを繋げさせてもらったよ」

「構わんさ。どうせ我らはそれぞれの住処に閉じこもっているだけだからな」

ツグナの謝罪の言葉に、アルガストが軽い口調で答える。他の竜たちも同様の意見を持っていたのか、アルガストの言葉にゆっくりと首を縦に振っていた。

「それで、我が先日告げたアイテムは出来上がったのか？」

アングレイトが訊ねると、ツグナは首を横に振りながら口を開いた。

「いや、まだだ。頭の中に構想は出来上がっているんだけどな」

「何？ ならばここで作製するというのか？ だがお前は――」

アングレイトはツグナの言葉に少々驚きつつもさらに訊ねる。ツグナに魔法適性がないことはこ

の三年の間にツグナ本人から聞かされていたので、アングレイトも知っていた。

「ああ、俺だけでは無理だ。だったら……その力を借りればいい。さあ、お前の力を貸してくれ……来い！ フラン！」

ツグナの呼び声に応えて、魔書から青白い燐光が柱となって上空へと吹き上がる。一直線に上空へと吹き上がった燐光は、さながら小さな竜巻のようでもあった。

やがて立ち昇った青白い光が周囲に散らばると、ツグナの目の前に、口角を持ち上げて笑う、片眼鏡をかけた少女が姿を現した。

「竜の逆鱗を材料に、か！ これは面白そうだ！」

五体の竜の視線を集めた少女——フランは、モノクルの縁をキラリと輝かせながら、開口一番嬉しそうな声を上げるのだった。

ツグナが自身の《創造召喚魔法》によってこの世に生み出した従者の一人——フランメル。小さな身体に不釣り合いの、ブカブカな白衣を纏う彼女の戦闘時における役割は、敵戦力の分析にある。だが、こうした非戦闘時においては、フランは「錬金術師」という別の顔を持っている。

自身の固有スキルである「詳細情報解析」を用い、物体の構造や構成成分を読み解き、高性能なアイテムを作り出す創造者^{クリエイター}、それが彼女のもう一つの顔なのである。

「なあるほど。確かにこれは熟練の錬金術師でも手を焼きそうな代物だねえ……」

モノクル越しに五枚の竜の逆鱗を解析し終えたフランは、顎に手をあてがいがながら眉根を寄せてポツリと呟く。

「手を焼くって……一体どれほどの代物なの？ 確かに竜の鱗だなんて、錬金術をよく知らない私でも、レア中のレアなアイテムなのだろうと予想がつくけれど……」

解析するフランを眺めていたリーナが首を傾げながら訊ねる。錬金魔法を取得していない者からすれば、それが素直な感想だろう。

「ふうむ……何て言ったら分かりやすいかな。この逆鱗は確かにレアアイテムだよ。それこそ市場に流せば、一枚当たり白金貨百枚は下らないほどにね」

「なっ……」

飄々とした態度でフランがサラッと口にしたとんでもない言葉に、その場にいる者たちが一気にざわつき始める。それもそのはず、白金貨は一部の特権階級が所有し、大きな商談の際に極稀に見られる類の貨幣なのである。そのため、ほとんど市場には流通していない。

一枚持つだけでも「大富豪」と思われるほどの価値を持つ通貨が、たった一枚の逆鱗と交換するだけで百枚は必要というのだ。

その価値の高さたるや、想像をはるかに超えていた。

「まあ話は少し脱線したけれど、これはそれほど稀少なものなのさ。それに、この逆鱗は材質だけを見てかなり特殊で、鱗自体が硬いのもあって加工しづらいんだ。それをアイテムに仕立てようとするには……ざっと見ただけでもレベル100超えの錬金術師が必要になるね。それでも成功する確率は五分五分だけだ」

「レベル……100超え……」

フランの流れるような説明に、ソアラが途端に不安げな表情を浮かべる。レベル100を超える錬金術師など、この大陸中を探しても片手で収まってしまうほどの人数しかない。そもそも錬金魔法は非戦闘職を代表するような魔法であるため、成り手が不足気味なこともその要因の一つに挙げられる。

また、それほどまでの技量の持ち主とあれば、国に召し抱えられていると考えるのが普通だ。

「レベル100で五分五分、か……フラン、いけるんだな？」

ソアラの顔を見たツグナが、念を押すようにフランに問いかける。その場の面々の視線を浴びながら、フランはにんまりと微笑んで力強く言い放った。

「見くびってもらっては困るよ主。ボクを誰だと思っているんだい？　ボクは錬金魔法の使い手にして、主の従者。主の望みに応えるべく、全身全霊をもって挑もう！」

白衣をはためかせながら自信満々に告げる彼女に、ツグナはふっと相好を崩した。

五体の竜と仲間たちが見守る中、ツグナの錬成は始まった。

五枚の逆鱗を地面に並べ、ツグナが胡坐をかくと、彼の右肩にフランがそっと手を触れ、目を閉じて集中する。

「キリア、頼む」

「ええ、分かったわ……」

ツグナの声に頷くと、キリアは手にした杖で二人に魔法をかけた。それは、対象者の基礎能力値の一つである器用値を向上させる補助魔法だ。この魔法を事前に施したのは、フランの要請があったからに他ならない。

もともと錬金魔法は、術師の器用値に比例して成功確率がわずかながら向上すると言われていたのだが、それは経験則の域を脱しない、噂のようなものであった。

だが、フランはこの法則を自らの固有スキルでもって客観的な数値で立証している。

「これでOKよ」

「ああ」

紫色の淡い光が自身らの身体を覆ったことを確認したツグナは、キリアの言葉に短く返すと、目を閉じて集中力を高める。

「行くぞ……スキルリンク！」

この声を鍵として、フランとの間に見えないパスが通った不思議な感覚がツグナを襲う。その感覚を維持しつつ、並べられた逆鱗に両手をかざしたツグナは、カッと目を見開き声を張り上げた。

「鍊成っ！」

声を張り上げた瞬間、大地に並べられた五枚の逆鱗がふわりと宙に浮き、吸い込まれるように一点に凝集される。そして集まった一点から白い光が辺りを照らした。

「うわっ!？」

「くっ！」

突然の発光に驚いた仲間たちと五体の竜は、目も眩むほどの光をそれぞれ腕や手で遮る。やがて発光が終わり、白い光に包まれた景色が元に戻るとそこには――

「な、何だコレは……」

「紫銀の魔術師」と名高いリリアですら見たこともないアイテムを手にしたツグナが、笑みを浮かべていた。

「これは――『天球儀』^{てんきうぎ} っていうアイテムだ。所有者が思い浮かべる人物の居場所を教えてくれる物だよ」

笑みを湛えながら説明するツグナだったが、その場ににいる者たちは皆、説明を受けてもイマイチ

よく理解できないでいた。

ツグナの言う「天球儀」は両手にすっぽりと収まるほどの小さなアイテムで、中心に青い球体があり、その周囲を銀色の円環がゆっくりと回っている。リリアたちは、ツグナの手にしたアイテムをどう使えば目的の場所に行くことができるのか、想像もつかない様子だった。

「このアイテムの効果はすぐに分かるさ。ほら……」

ツグナの言葉に応えるように、彼の手中に収まっていた天球儀の中心にある球体から、細い光が上空へと伸びる。

「もしや、あの光の先に？」

すっと彼方^{かなた}に伸びる光を見ていたアルガストが、ツグナに訊ねる。

「ああ。この光を辿っていけばきっと出会えるさ。アングレイトが言っていた黒き竜にな」

ツグナもまた空へと伸びる光を見やりながら、アルガストの問いかけに答える。

「なるほど……所有者の望む場所へと導く光か。これはまたとんでもない物を作り上げたな」

「ええ。本当に。とんでもないアイテムですね」

じつと光の先を見つめるツグナを眺めつつ、リリアとシルヴィは互いに感想を述べ合った。

望む場所を指し示す、とはすなわち所有者の願いを叶えるということにも通ずる。これまで訪れたことのない場所でさえも正確に指し示すことができるこのアイテムは、誰しもが欲しがるものだ

ろう。

「ふむ。ならば、早速行くのか？」

向かう先の方角を確認したアングレイトが訊ねると、ツグナは「ああ」と短い返答と共に深く頷く。

「当然だろ。やっどこまで来たんだからな」

「分かった。ならば行くでしょう」

ツグナの返答を受け、アングレイトを始めとした五体の竜が一斉にその両翼を広げる。色とりどりの竜が翼を広げる様は、まさに圧巻のひと言であった。

「わ、私も……」

ソアラが不安げな表情を見せながら、自分も連れて行ってほしいと願ひ出る。だが、アングレイトは静かに首を横に振った。

「気持ちとは分からんでもないが、お主らを連れていくことはできん。かの地に連れていけるのは竜の逆鱗の所持者だけだからだ。たとえ親しき仲であろうと、資格のない者をむやみに連れていくことはできんのだ」

「……」

すげなく断られてしまい、ぺたりと狐耳を頭につけてしゅんとするソアラ。それを見たツグナは、

彼女の傍に寄り、そつとその頭に手を置いた。

「ふえ……」

「まあちよつと寂しいだろうが、事が終わればすぐに帰ってくるよ。帰ってきたら待つてもらったお詫^わびにおいしいものを作ってやるから」

すりすりと頭を撫でるツグナに、ソアラは小さく頷く。

「あゝっ！ ずっーい！ ソアラはっかりいい思いをするなんて！」

二人の様子を見ていたアリアが頬を膨らませながら、自分も彼女と同じように、と自らの頭をツグナに向ける。

「それもそうね。同じレギオンのメンバーなのだから、仲間に対しては平等でないとね」

「ですね」

キリアとリーナも負けじとアリアに倣^{なら}い、ずいっと頭を差し出した。

「あーうん。分かった分かった」

女性陣の殺気にも似た剣幕に押されたツグナは、やや頬を引きつらせながら彼女たちの要望に応える。

「けど、シルヴィには差し出されてもやらないからな」

「なっ……！！」

しれっと告げられたツグナの言葉に、シルヴィの身体が硬直する。目を見開いて驚く彼女に、ツグナは呆れた顔のため息交じりに呟いた。

「いや……自分と年のかけ離れた女の子に張り合うとか大人げないだろ」
もっともな言葉にシルヴィは二の句を継げず、ただ呆然と見ていることしかできなかった。



「さすがに上空は冷えるな」

アルガストの背に乗り、天球儀が指し示す方角へ進路をとるツグナは、肩を竦^{すく}ませながらポツリと呟いた。仲間たちと別れて早一時間近くが経過しようとしており、飛び立った竜たちは、厚い雲の中へと突入している最中であつた。

「それは我慢してもらえないかな。寒さを緩和する補助魔法でもかければ別だろうが……」
ツグナの呟きを間近で拾ったアルガストが、やや歯切れ悪く返す。実はアルガストたちは飛行する際に、厳しい外部環境を緩和する魔法が無意識のうちに発動するのだ。

だが、この魔法はあくまでも自分の身を守るものであるため、ツグナには効果が及ばない。アルガストが若干言い辛そうにしているのはこのためである。

「俺に魔法適性がないことは知っているだろ？ どのみち出発前に魔法をかけてもらっても、いずれ効果が切れるだろうから意味はないさ。それに、今着ているこの服だつてはある程度の防寒効果がある。言われた通り、到着まで我慢するよ」

「そうか」

すると、傍にいたアングレイトから声が上がる。

「もうすぐ雲を抜けるぞ」

その声に気を取り直したツグナは、天球儀が指し示す進路の先を見据えた。

「うはあ……こんな高さまでやって来たのは初めてだな……」

雲を抜けた先に広がるのは、まさに絶景と呼べるものである。足元にはどこまでも続くようにも見える白い雲があり、また頭上には澄み切った青空が広がっている。眩しいほどの陽光が歓迎するように照らす中、ツグナの手の中に収まっているアイテムは、ある一点を指し示していた。

「おいおい……嘘だろ……」

アイテムの光が指し示す場所。

そこは――空の上に浮かぶ大きな島であつた。

第3話 黒竜邂逅

「うーん。このアイテムがなきゃ辿り着くことはできなかっただろうな。なんせ……こんな上空に島があるなんて、誰も思わないだろうから……」

アルガストの背に跨ったツグナは、空に浮かぶ島を眺めてそう零した。

光に導かれる彼の目には、宙に浮かぶ大地から木々が生い茂る島が捉えられている。近づくにつれて大きくなる島の周囲には、今しがたツグナたちが抜けてきた雲海が彼方まで広がっており、ため息が出るほどの幻想的な光景がそこにはあった。

「……そう思うのも無理はなからう。この島の存在自体、知られているものではないからな。ましてや、『空に浮かぶ島がある』などと言われたところで、誰もそれが真実だとは思えない。さて……そろそろ到着するぞ」

アルガストの言葉を皮切りに、竜たちが次々に島へと上陸を果たす。ツグナも島に降り立ち、周囲を眺めてみると、鬱蒼と茂る木々はそのどれもが太古からの長い歳月を今日まで生き続けているものだということが分かった。

「……うん？ ここにはモンスターがいないのか？」

周囲に目を向けていたツグナが、ふと他の生き物の息遣いや気配がないことに気づき、隣にいたアングレイトに訊ねる。

「ああ。お主の言う通り、この島にはモンスターと呼ばれる生き物は棲息していない。この島にいるのは、これより会いに行く黒竜のみだ。というのも、地上から数千キロメラもの上空にあるこの島は、生物が生存していくにはそもそも厳しすぎる環境なのだ。もともと、お主はこの島に降り立つ直前に我がかけた魔法によって、高高度に位置するこの島でも通常と変わらぬ動きができるようにしているがな」

ツグナはそつとステータスと呼び出して、自身の状態を確認する。確かにステータスには、名前の横に魔法の支援を受けていることを示す印が記載され、先ほどのアングレイトの言葉を裏付けていた。

「へえ……でも黒竜はどうなんだ？」

「なんでも黒竜は特別らしく、どのような環境下であっても適応できるらしい。我も詳しくは知らないのだがな」

「そうか」

ステータスを確認し終えたツグナは、アングレイトたちを引き連れて天球儀の示す光に導かれて